

モナドロジーの二つのアспект

ーベールによるライプニッツ批判を通じてー

枝村 祥平

問題の所在

ライプニッツ哲学のテーゼの中で、最も著名で、かつ最も悪名高いものの一つは、「モナドは窓を持たない」(M7)というものであろう。モナドは、神に創造された後は完全に自発的な自己展開をする。それゆえ、モナドは外部から何ものかが入るような窓を持たない。ただモナドの内容には、互いに対応関係がある(M56,57)。そこから、モナドの一種である自我が、他人と同じ対象を違った方向から見ているといった日常的な出来事も説明されるのである。こうしたモナド同士の対応関係は、予定調和(l'harmonie préétablie)とも呼ばれる。

この対応関係を要請する説に対しては、様々な批判がなされてきた。つまり、モナド同士は互いに働くことは出来ないから、それらに対応するためにはそれらを統括する超越的原因＝神の作為を待たねばならない⁽¹⁾。そして、ライプニッツによる神の存在証明ないし、神がどのようにして被造物を創造するのかについての証明が論駁の余地がある⁽²⁾以上、予定調和説は独断論の謗りを免れない、など。

さて、しかし、以上のような批判を投げかけるには、ライプニッツが言わんとしていることを十全に理解することが必要であろう。そこで、予定調和説に関する議論が綿密に繰り広げられていると思われるテキストを選び⁽³⁾、そこから彼の真意を読み取ることを目指したい。予定調和の語が初めて持ち出されるのは、1695 年に『学芸雑誌(Journals des Savants)』に掲載された『実体の本性と交渉ならびに心身結合に関する新説(Système nouveau de la nature et de la communication des substances, aussi bien que de l'union qu'il y a entre l'âme et le corps)』に関する疑問にライプニッツ自身が答えた『新説の解明(Éclaircissement du nouveau système 1696)』だとされる(GIV499)。そしてこの後、ライプニッツとベールの間に、予定調和説をめぐる活発な議論が展開されるのである。本論では、ベールによる批判とそれに対するライプニッツの反論に注目し、これを手がかりにライプニッツの主張内容を整理することにしたい。それを通じて、ライプニッツの形而上学が、個体ないしモナドが存在として自立していながら(第一のアспект)、同時にそれがその本質からして他の個体と適合関係に入らざるを得ないと考えられており(第二のアспект)、それ故に全能の神

が意図的な作為によって対応関係を設定した訳ではないと考えられていることを確認することを旨したい。

ベールによるライプニッツ評 —『歴史批評辞典』における—

ベールの『歴史批評辞典』のロラリウスの項では、比較的短い本文に続いて膨大な量のベール自身による注釈がなされている。ロラリウスとは、獣が人間よりも理性をよく用いる旨を一種の詭弁をもって著作で示した人物であり、この項では動物の理性や魂について考察が及んでいる。ベールによれば、動物の魂の存在を否定するデカルト派の議論は受け入れ難いが、また一方でその存在を認めるのであれば、それに伴う諸問題に答えなくてはならない。こうした脈絡の中で、ライプニッツの存在論が検討されるのである。そしてまず、予定調和説には動物の靈魂の存在を他の説が孕む数々の難点を回避しながら認めることが出来る⁽⁴⁾といった利点がある、と述べられる。しかし一方、「ライプニッツ氏の仮説は、氏の天才の幅と力を示してはいるが、痛い点がいくつかある」⁽⁵⁾ともされ、種々の難点が挙げられている。

ところで、ベールのテキストは、さまざまな事柄に縦横無尽に触れ、そこではある論点が博識・才知を駆使した具体例や多岐にわたる論理展開によって検討されるといった観がある。だがその反面、あるテーマやモチーフが、細切れに提示されることがしばしばである。そこで、ベールのテキストにあらわれた、種々の論点を、読み手なりに整理し、再構成する必要がある。

さて、私見では、ベールによるライプニッツ批判は様々な論点に及んでいるが、大まかに二つに分類することが出来るように思われる。一つは、概念を分析し、その整合性を問うような批判である。つまり、モナドという存在者における概念的に規定される性質（「一挙に創造される」「自己完結しており、外界との交渉を持たない」「単純体である」）を踏まえた上で、それが多様性を持つことが出来ないというものである。

二つ目は、我々の経験によって知られる事柄とライプニッツの理論との不整合性を突く批判である。棒に打たれると苦痛にうめく獣、赤子から將軍へと成長するカエサル、などが理論と齟齬をきたす事例として挙げられている。

これらを改めて整理することにしよう。

ベールによる批判とライプニッツの答えⅠ —概念分析による批判に関して—

第一の論点についてのベールの主張は以下のようなものである。神が創造に際してモナドに力を加えるとしよう。すると、モナドの運動は、あたかも放り出されて一方向に運動

を続ける原子のように、単調なものになるはずである⁽⁶⁾。だから例えば最初の状態が快樂であれば、それに続く状態もずっと快樂であるはずである⁽⁷⁾。一隻の帆船が、何の操縦もなしに潮や暗礁をくぐって航海を何年もなすようなことはあり得ないのと同じく、永久に複雑極まる運動を完全に自発的に継続することは被造物のキャパシティを本質的に超えている⁽⁸⁾。もし、被造物が多様性を持つとすれば、それら全てが自発性に基づいて展開されているのではなく、自己以外の存在者からの働きを受容していることによるはずである。然るに、ライプニッツはモナドが、一挙に想像され、その後は何の外的作用をも受けずに様々な内容を順次展開するとしている。ましてや、モナドとは単純者であり、複雑に構成された機械のような様々な動きがこなせるはずもないのである⁽⁹⁾。従ってモナドにおける多を主張するライプニッツの説は不合理であると言わざるを得ない(GIV542～543)。

さてゲルハルト版『哲学的著作集』には、ベールの予定調和説批判に対してライプニッツが弁明ないし反論したテキストが掲載されている(GIV517～571)。そこで、その反論を整理してみよう⁽¹⁰⁾。それは以下のようなものである。

確かに事物は外的な作用が加わらなければ、以前の状態を保持するものである。それ故に、変化しないような状態にあるものは、未来においても変化しないであろう。だが、最初に変化している状態にあるものは、未来においても変化を続けるであろう(GIV518)。静止している物体は、放っておけば静止したままである。運動しているものは、同一速度で動き続ける。それらは皆、同一の法則に従いながら、存在し続けている。同様に、魂（ひいては全てのモナド）は複雑な変化をするべく創造され、かつ創造された当初からそういった変化をしており、それは止むことがない。ただ、魂は、物体には及びもつかないような複雑な変化をする。物質(matière)である原子と魂との大きな違いをライプニッツは指摘し(GIV543)、ベールが魂を原子に喩えることによって困難に陥っているのはそうした違いを見落としているからであるとする。モナドの単純性に関しては、ライプニッツは、一様に働くことと同一の法則に従って働くことを区別すべきだと言う(GIV522)。例えば放物線状の運動は、一定の法則性を持つが、決して直線運動のように一様ではない。それと同じく、モナドも一定の法則にのっとりた上で複雑な運動をしているのである。

モナドを貫く秩序ないし法則 —第一のアспект—

以上のような議論は、ライプニッツが50代以降に書いたこのテキストにおいてのみ見られるものではない。彼は若い時分から、個体を一つの個体たらしめる契機について考察してきた(ex. GIV17～26)。『形而上学叙説』では、そうした議論を踏まえ、個体は多様性を持ちながら、一方で一定の秩序をも持つものであるとされる(DM14)。個体的実体は、自

己固有の秩序に従ってその内に含まれている内容を展開するのであり、我々が経験する出来事も全てかかる秩序に沿ったものなのである。

こうした見方は、晩年でも維持されている。ライプニッツは、様々な現象の根底にあって、これを存立せしめる実体的なものについて考察し、このような根本的契機を、原始的エンテレケイア(entelecheia primitiva)と呼ぶ。単に受動的にのみ存在している事物には、現象の基礎となってこれを支える能力がない。というのも、それは何らかの刺激に合わせて何らかの変様を自分の内に起こすことは出来るものの、そうした刺激なしには何の変化も出来ないし、ましてや新たなものを生み出すことは出来ないからである。そこで、現象の基礎には必ず能動的なものが要請されることになる。こうした個体において多様な現象をもたらす契機が原始的エンテレケイアである。そして、これは、一連の変化を、そうした変化・推移を超えたところで支えるような法則を本性として有するとされる(G II 171)。このようにして、ライプニッツにおいて、多様な内容をもつものにおける一性が、そうした内容を統括するような秩序の一性として、論理的・概念的にさしあたって可能なものとして示されるのである。そして、この秩序が様々な多様性を生み出すとされるのである。これが先に述べた、本論で言うモノドロロジーの第一のアスペクトである。

さて、個体が自己展開の法則をもつとすると、確かに個体に含まれる様々な内容に関する統一性は保持されるかもしれない。しかし一方、その「法則」は、そうした規定のみでは一個体における法則以上のものではない。この「法則」が他の個体から独立したものであれば、個体同士の関係はいかなるものとなるのか。個体の自己完結性を強調することは、却って個体同士の関わりを希薄にするようにも思えるのである。そのような観点から重要になってくるのが、ベールによる批判の第二の側面である。

ベールによる批判とライプニッツの答えⅡ ―経験的な事例との比較―

これまでに提示したベールによる批判点は、モノダが神によって一挙に創造される存在者であるという主張と、モノダにおいては汲めども尽きぬ多様性が見出されるという主張との整合性を吟味したものだと言うことができる。が、ベールの批判はこれのみに尽きるわけではない。彼はまた、魂という存在について経験的に気づかれる様々な事柄をライプニッツの学説に従って説明することは困難に思われるという、具体的な経験に照らした上での批判も展開している。例えば、餌にありついて快樂を感じている犬を突然棒で打ちのめすとき、その犬は激しい苦痛を感じることになる⁽¹¹⁾。この場合、犬の魂は快樂を持った状態から苦痛を持つ状態に急激に移行する。このような以前の状態からは到底予想がつかないような変化は、モノダが外界から独立していて自己内的推移を繰り返すのみであると

いう立場からは説明出来ないのではないか。むしろ魂が絶えず外界と直接の交渉関係を持ち、外界からもたらされるものによって時には急激な変化を遂げたりすると考える方が自然なのではないか。

これに対して、ライブニッツは、どの魂においても、「世界の集中(concentration)」⁽¹²⁾ (GIV542)が見出され、宇宙を固有の視点に従い表現する力が与えられていると言う。この考えからすれば、モナドにおける多様性は、宇宙そのものの多様性に対応づけられることになる。そして、ベールの提示するような、「外界からもたらされる」急激な変化もまた、宇宙全体における出来事の一つであり、それ故にモナドに反映されるべき出来事として説明されるのである。モナドは一であると言われるが、そこでの一性とは、宇宙の違った形での集中に他ならない(GIV518)とされる。ある一定の視点が、宇宙の様々な事柄が取り結ぶ無限の諸関係が、モナドにおける多様性に対応する。一個の視点は不可分の点であるが、そこには無限の多が集中されているのである。無論、モナドに現れてくる事柄が全て意識されるわけではない。ベールは、魂が自己の内に含まれているものを自発的に展開するならば魂は自己展開のプログラムを理解しているはずなのに、実際は我々はこの先に何が起こるかもわからないではないかと言う⁽¹³⁾が、自発的な作用が全て明確に意識されるとは限らないとされる(GIV532)。魂はときに予期せぬ苦痛や不幸に見舞われるが、そういった出来事の原因は意識されぬ微小表象の中に存在しているのである。

「世界の集中」の内実とは

それでは、このベールに対する反論に述べられている「世界の集中」とは何であろうか。この表現は多分に比喩的であって、これのみからその概念的内容を確定することは難しい。思うにその内容は論理的に二通りに解釈可能であると思われる。その概要を以下に示そう。

①個体はそれぞれ確固として独立した実体であり、実在としての基本単位である。それゆえ、この個体の内容が、宇宙におけるそれ以外の存在者によって規定されることはない。もっとも、神は、そうした基本単位である個体の内容を全て見渡している。そして、内容において不整合性があるような複数の個体を同時に実在させないでおこうという意志を有している。神は、こうした意志の遂行にあたって失敗するようなことはあり得ないので、結果として凡そ実在する全ての個体は、その内容において対応し合う。こうした状況においては、ある個体の内には、他のどの個体のどの内容にも対応するものが必ず見出される。このようにして、現実存在している個体は、宇宙そのものを自己の内に映しているかのよう存在することになる。これが「世界の集中」の内実である。

②個体は、文字通り世界ないし宇宙全体を何らかの形で「集中」させたものとして存在

する。つまり、個体の内容は、そうした経緯によって規定されるのである。「集中」とは、個体の本質が全体として確定される過程に他ならない。それぞれの個体は、同一の宇宙全体を存立の段階で反映せざるを得ない。このような事情により、神は作為によって個体同士を互いに対応するように設定した上で宇宙全体を創造するような必要性がない。個体相互は、そもそも互いに整合的なものとして生まれて来ざるを得ないのであり、不整合性はそこでは生じる余地はない。

①の解釈について ―論理学との関連を踏まえて―

それでは①の解釈について考察してみよう。予定調和というタームを提示する以前の1690年に書かれた『形而上学叙説』によれば、個体ないし個体的実体は宇宙を一定の視点から表出するとされる(DM9,14)。そして、「表出」とは、一方について言えることと他方について言えることとの恒常的で規則的な対応関係を指すとされる(G II 112)。そうすると、個体による宇宙の表出とは、ある個体と他の全ての個体との恒常的・規則的対応関係を意味すると解釈する余地があることになる。つまり、個体は全て、自己固有の秩序を持ち、それに従って連続的に様々な内容を展開する。そして、どの二つの個体の内容にも、確たる対応関係が見出される、というように。

このことは、論理的には可能であるようにも思われる。というのも、そうした関係の一種として数学上の写像関係を考えることが出来るが、その間に一对一の写像（つまり全単射とその逆写像）を設定することが出来るような二つの集合はごくありふれたものだし、それに属するどの任意の二つの集合の間にも一对一の写像関係が存在するような集合の無限数の集合も簡単につくることが出来るからだ⁽¹⁴⁾。すると、こうした集合の元を個体を持つ様々な性質になぞらえるならば、互いの性質が対応し合う個体は十分に存立可能であるようにも思える。このような個体観に沿えば、個体は相互に独立し、しかもそれら相互を比較すれば、それらのどの時点での状態でも互いに対応していることがわかることになる。

それでは、かかる個体観が、ライプニッツの取るものであったのだろうか。個体が自己固有の内容（表象あるいは眺望）を持ち、さらにそれが他のものの内容と対応し合うというような存在論について、ラッセルとクーチュラは、それをライプニッツの論理学に呼応したものであると解釈する。この二人によれば、ライプニッツはアリストテレス以来の論理学を信奉し、述語が主語に包含されるとき、その述語と主語によって構成される命題が真になると考えたとされる。例えば、「人間は動物である」という命題は、「理性的動物は動物である」と書き換えられ、「動物」とあるという述語は「理性的動物」という主語の内包的部分をなし、これに包含されると言えるので、真であるとされる。同様に、個体的実

体に保持される性質は、個体的実体という主語に包含されるものであり、純粹に内的だと考えられる。これは存在論としては①の解釈に相当するものである。

①の解釈に伴うライブニッツ評価

それでは、なぜ彼らは、このような解釈を取ったのであろうか。ラッセルは、ライブニッツの論理学と形而上学的存在論の密接な関係を認識していた。そして、ラッセルは、ライブニッツにおける、アリストテレス・スコラ的な考えの理論的な徹底化を評価する。すなわち、アリストテレスやトマス議論では、個体的実体はその性質を内包するが、一方で外部との関わりあいによって新たなものを受け取ったり旧来の性質を失ったりすることになる。ところがその場合、個体的実体を含むものはその都度変化することになる。そうすると、個体的実体の自己同一性はいかにして保持されるのかという問題が生じる。主語が述語群を構成要素とするものであれば、述語が変化すれば主語もまた厳密にみれば変わってしまうと考えるのが自然であるからである。ラッセルにしてみれば、ライブニッツは、いかなる時点における個体の性質も既に個体の内に含まれていると主張することによって、この問題を回避したということになる。このように論理学の原理を重視し、哲学体系に一貫性を持たせようとしたことは、ひとまず評価される⁽¹⁵⁾。

しかし一方ラッセルは、ライブニッツを、現代論理学の方向性を十分に先取りした人物と評価していたわけではない。ラッセルは、主語―述語形式（述語が主語に純粹に内的なものとして包含される形式）に依拠した論理学では関係の問題をうまく扱えないにも関わらず、ライブニッツにおいて、関係は非関係的な属性に還元可能であると考えられていると解釈する⁽¹⁶⁾。そしてクーチュラは、ライブニッツがこのように旧来の論理学に留まったのは、アリストテレスやスコラの伝統に対する過度の敬意によるとしている⁽¹⁷⁾。

ライブニッツの関係観

それでは、このような解釈は正当なものと言えるであろうか。確かにライブニッツは、専ら論理学的な著作において、明らかに関係的であると思われる概念を構成要素としている命題を書き換えようと試みている。例えば、「パリスはヘレネを愛する(C287)。」は「パリスは愛する。そして、そのことによって(eo ipso)ヘレネは愛される。」と書き換えられる。

そして、晩年に書かれた『クラーク宛の書簡』でも、一つのものを主語とする比と、特に主語ないし述語を定めずに考える比があるとし、これらを区別している。

L と M という二つの線分の比あるいは割合は3通りの仕方で理解する事ができる。より大

きいLのより小さいMに対する比として、あるいはより小さいMのより大きいLに対する比として、最後に何か二つから抽象したものとして、つまりどちらが先行者で後継者であるかあるいは主語で述語であるかを考えずにLとMの比として。そしてかくのごとく割合は音楽においても考慮されている。第一の考えでは、大きい方のLが主語である。第二の考えでは、小さい方のMが哲学者たちが関係あるいは連関と呼んでいるところのこの偶有性の主語である。(GVII401)

ここの記述に照らせば、どちらの比もともに概念としての資格を有し、かつ互いに他方を表現することが出来るということになる。そして、分数すなわち「関係とよばれる偶有性」は、LあるいはMという単一の主語に帰するとされるのである。つまり、長さLの線分は「長さMの線分に比べてL/Mの長さである」といった性質を持つのである。

それではライプニッツは、一つのものを主語とする比を非関係的な述語と考えたのであろうか。ラッセルはこの記述から、ライプニッツは関係を「理性の造ったもの」でありそれゆえに人間理性によって加工される以前の姿＝非関係的概念に還元可能であると考えていたと解釈しているようである⁽¹⁸⁾。しかし私はこの点に関し、『人間知性新論』における次の記述に着目したい。

しかしそれは直ちに現れる認識という限界に留まることによってなのです。そのような認識は、混雑しているか、判明ではあっても不完全です。前者は観念の分析されていない場合であり、後者はそれが制限されている場合です。そうでなければ、関係を含めぬくらいに絶対的で孤立していて、完全な分析が他の諸事物や全ての他の事物へ導かれないような言葉はありません。(NE 2,25,10)

以上の記述からは、ライプニッツが、完全に独立的で他のものとは関係をもたないような言葉ないし概念は、厳密な意味では存在せず、そのように思えるのは人間の認識が完全なものとなっていないからであると考えていることが伺える。認識がより高度になれば、必ず認識対象である言葉ないし概念が含んでいる、他のものとの関係が、見えてくるはずであるというのである。そうすると、晩年のライプニッツは、関係を非関係的なものに還元出来るとは考えておらず、むしろ関係とはそれを考慮することなしには十全な認識が成立しないような根源的なものであると考えていることになる。

してみれば、論理学的著作における関係的命題の書き換えもまた、関係の還元・解消を意図してなされているとは限らないことになろう。石黒氏は、ライプニッツによる関係的命題の書き換えを関係的命題の非関係的命題への還元であるとする解釈に対して、書き換

え後の命題においても関係は関係的述語として存続していると述べている⁽¹⁹⁾。また、ムニャイは、書き換え後の命題の論理的表現に関し細部では石黒氏に賛同しないが、それでも個体概念には関係的性質が含まれているとする⁽²⁰⁾。確かに、『クラーク宛の書簡』で二つの線分がともにもう一方との比の主体として認められていることからすれば、パリスに「(ヘレネを) 愛するものである」という関係的述語が帰され、ヘレネが「(パリスによって) 愛されるものである」との関係的述語が帰されうるのであろう。

以上から、私は、ライプニッツが関係的概念を非関係的概念とは異なる独自のものとして認めていたと考える。

②の解釈の正当性 ―第二のアспект―

さて、以上は関係についての一般的議論であるが、それでは個体と他の個体との関係についてはどのようなことが述べられているのであろうか。この点に関し、私が最初に挙げたいのは、『アルノー宛の書簡』における次の記述である。

人間界の全ての出来事は現に起こった通りにしか起こり得ない…〔それは〕このアダムの個体概念にも入りこんでくる、この宇宙全体の概念を決定し、それに加えて(ensuite)アダムの概念のみならずこの宇宙における他の全ての個体的実体の概念まで決定する神の計画による。(G II 51)

ここから、少なくとも、神が被造物を創造する際には、一個の被造物を単独的に観念し、宇宙全体をそうした個々の被造物の集積ないし総和として認識していたわけではないことが読み取れるのではないだろうか。

さらに、ライプニッツは、アルノーとの議論から数年後の1690年に、『24の命題』を書いている⁽²¹⁾。そこではまず、全ての事物の原因として神が要請される(第3命題)。そして、神以外の可能的諸事物も、実在への傾向性を持つとされる(5)。しかし、可能的諸事物の内には、互いに両立不可能なものがある(7, 8)。こうした事情から、可能的諸事物が最大限に存在しうるような諸事物の系列つまり宇宙が実在するに至る(9, 10)。そして、個体の本質は、個体が現実世界のものでも単に可能的であるようなものでも、全て神の知性の内にあり、神によって完全な形で認識されている(G II 42)。『24の命題』の議論によれば、こうした単に可能的であるような個体についても、それが他のものと両立可能(あるいは共可能的)であるか否かを問うことが出来るのである。そうすると、共可能的であるかどうかを判別するようなメルクマール(つまり共可能性の有無)が、個体の

本質自身に含まれているのでなければならない。それはつまり、全ての存在は、それが属する世界と適合したものでなくてはならないということである⁽²²⁾。それは言い換えれば、個体同士の一致対応あるいは予定調和が、現実世界をも含むあらゆる可能世界で保持され見出されるような絶対的な原則であるということである。こうして、予定調和ないし個体同士の一致対応が、現実世界のみには留まらないア・プリオリな原理となる。では、このような共可能性は、どのようにして説明されるのであろうか。もし仮に個体が、それ自身の内に他の存在者との関係を含むのでないとするなら、このことは説明が困難であるように思われる。というのも、別の個体に含まれている純粋に内的で関係を含まないような二つの性質が、相互に矛盾を引き起こすとは考え難いからである。

以上のように考えると、個体を形成する概念（あるいは個体全体の本質）には、少なくともかかる共可能性を根拠付けるような他の個体との関係が含まれていると解釈すべきであり、①の解釈はテキストに照らして取り難いと思われる。そして、個体における「世界の集中」もまた、個体と世界との単なる外的対応関係ではなく、世界のあらゆる事物が個体の内に見出される他のものとの関係の中に集約されるという事態を意味しているのではないだろうか。そしてこれが本論に言うモノドロジーの第二のアスペクトである。

確かにベールが、外界と個人との実際の交渉を要求しながら、一方で、あくまで文面上ではあるが、ライプニッツの予定調和説を他の説よりも評価し、これに期待を寄せていたのも事実である。そうすると、ベールは、外界と個人との実在的な交渉を、いかなる議論によっても否定不可能な絶対的要件であると考えていたかどうかについて一考の余地があるかも知れない。だがそうした事情を考慮しても、ライプニッツの他のテキストと読み合わせるならば、ライプニッツはこの弁明において、『新説』で明示的に触れられなかった一個体に見出される他の存在との関係について言及しこれを認めているように思われるのである。

結び ―総括と新たな課題―

以上により、ライプニッツは、個体がその内に他の個体との関係を含んでいるものであると考えていたと思われる。では、そのことと、第一のアスペクト、すなわち個体は自身の統一性の原理を有しているとの主張とは、両立可能なのであろうか。この点に関しては、次のように考えるより他にないように思われる。つまり、一つの個体のもつ統一性の原理ないし秩序は、他の個体との関係をもそこから派生させるようなものであるということである。モノドは、その内に固有の秩序を有し、それに従って様々な事柄を展開する。しかしながら、モノドはその存立段階において同一世界における他の全ての個体との関係をそ

の内に含んでいると考えられているので、そうした秩序は一個体の秩序に留まることなく、宇宙全体の秩序(ex.DM6,M58)を固有の仕方では反映したものになっている(M63)。このような世界観は、批判者からすればなお「独断論的な」色彩を留めているであろうが、冒頭に挙げた批判者の理解とはかなり違ったものとなっている。ライプニッツは、個体の独立性を強調するあまりそれらの対応関係を神に求めざるを得ないと考えたのではなく、個体それ自身の内に独立性と適合性の原理を求めたのである。

最後に、新たに問題となる事柄に触れたい。個体同士の関係は、論理や概念のレベルのみならず動力的な存在論の観点からも語られている⁽²³⁾。例えば、神は二つのモナドを比較し、一方が他方に適合せざるを得ないような理由を見出すとされ、この場合一方が他方に対し能動的であるとされる(M52)。そして、被造物はその限りにおいて、外へと作用するのだとされる(M49)。ここでライプニッツは、どの個体も他の個体との関係を自己の内に含むのみならず、個体相互には能動性（あるいは完全性）における優劣があることを述べている。ライプニッツにおける個体同士の関係、及び個体相互の共可能性の問題は、このようなある個体が他の個体を自分に対し適合させるような、ある種の力学的な平衡関係をも視野に入れなければ十分には理解出来ないように思われる。そしてさらに、私見では、この「力の担い手」とであるという契機が、モナドの独立性を補完する。個体が固有の秩序によって自己同一性を保持するとしても、その秩序が他の個体との関係によって規定されるものであれば、未だ個体の独立性について疑問が残るのではないだろうか。ライプニッツが、モナドを様々な性質を述語として含む主語としてのみならず、他のモナドと拮抗関係にある力の主体として把握しようとしたことの背景には、このような事情もあるように思われる。しかし既に紙面は尽きているので、他日を期したい。

註

(1) Kant, *Kritik der reinen Vernunft* 1 B.331 (I -Zweiter Teil-Zweites Buch Anmerkung zur Amphibolie der Reflexionsbegriffe).

(2) Russell, *A critical exposition of the philosophy of Leibniz*, section 108~110, p.174~177. Kant, *ibid.*, B.480~489, 620~658.

(3) ライプニッツはそれ以前にも、例えば 1686 年に書かれた『形而上学叙説』で、個体同士の一致対応関係に触れている(DM9,14)が、これを下敷きに繰り広げられたアルノーとの議論は、決定論の問題などが主題であって、一致対応関係についての議論は薄いように思われる。

(4) ベールは、動物の振る舞いを見れば彼らが魂を持つことは自明であり、デカルト派の主張は受け入れ難いとする。だが、動物の魂には我々の魂が持つような不死性がないとされることから、彼らの魂がどこから生まれどこへ行くのか問題となる。全ての魂は一挙に創造され、それらはずっと身体と結びついているとされるライプニッツの説は、この問題に関して比較的説得力があるとされる。

Pierre Bayle, *Dictionnaire historique et critique* XIII 1696(Slatkine reprints, Genève 1969), p.608. 野沢氏の訳を参照したが、引用箇所の訳は筆者自身のものである。野沢協訳 『ピエール・ベール著作集』 法政大学出

版局（第3～5巻に『歴史批評辞典』が掲載されている）

(5) Bayle, *ibid.*, p.610.

(6) Bayle, *ibid.*, p.617.

(7) Bayle, *ibid.*, p.620.

(8) Bayle, *ibid.*, p.617～619.

(9) Bayle, *ibid.*, p.611.

(10) ゲルハルト版の『哲学的著作集』には、この反論を繰り広げた覚書の他に、ベールとライプニッツが交わした書簡集が掲載されている(GIII p.21～72)。しかしこの書簡集は、ライプニッツによるデカルト批判が主な論点となっており、さしあたって本論での考察との関連性は薄いように思われる。そこで本論では、覚書の方を専ら参照した。

(11) Bayle, *ibid.*, p.610.

(12) 「集中」の訳は、酒井・池田両氏に従ったものである。酒井潔 『世界と自我』 創文社 1987 p.227。
池田善昭 『モナドロジーを読む』 世界思想社 1994 p.15。

(13) Bayle, *ibid.*, p.621.

(14) 自然数の集合 N と N の各元を a 倍(a は任意の 0 でない実数)した数を元とする集合 A の間には、一対一の写像関係が存在する。つまり、任意の N の元 n について $n \times a = an$ $an \times 1/a = n$ である。こうした A は、 a を変えることによっていくらでも取ることが出来る。 A となりうる集合の集合は、実数の集合と同様の濃度である。

(15) Russell, *ibid.*, sec7, p.8.

(16) Russell, *ibid.*, sec10, p.15.

(17) Couturat, *La logique de Leibniz*, Paris, 1901, 再版 Hildesheim, 1966 p.438. もっともクーチュラは、関係の還元性の問題よりも外延的アプローチを取らずに内包的な立場に留まったことを問題視している。

(18) Russell, *ibid.*, sec10, p.15.

(19) 石黒ひで 『ライプニッツの哲学』 岩波書店 1984, p.146.

(20) Mugnai, *Leibniz's theory of relations*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart 1992, p.133.

(21) 『24の命題 (Die 24 Sätze)』 (GVII p.289～291)はハイデッガーの命名によるものであり、ライプニッツ自身が著作にこの表題を付したのではない。

(22) なお池田氏は、共可能性を現実存在の根拠だとし、「対応(correspondance)」と「一致(accord)」といった表現を経て、1696年頃に「予定調和」に結実するとする。

池田善昭 『モナドロジーを読む』 世界思想社 1994, p.8～9。

(23) ゲルーは、論理的側面に重点を置いた解釈に対し、自らの動力学を重視したライプニッツ解釈を対置させる。

Martial Gueroult, *Leibniz Dynamique et Métaphysique*, by Editions Aubier-Montaigne, Paris, 1967, p.1.

略号

ライプニッツからの引用は以下の略号による。

G: Gerhardt(ed.) Die Philosophischen Schriften

GM: Gerhardt(ed.) Mathematische Schriften

C: Couturat(ed.) Opuscules et fragments inédits

NE: Nouveaux essais sur l'entendement humain

M: Monadologie

DM: Discours de Métaphysique

PNG: Principe de la Nature et la Grâce

T: Theodicée

S: Système nouveau

[哲学博士課程]